

イエメン現代史

イエメンの現代史は、1904年にイマーム職を継承したヤヒヤーが、トルコに対する全面戦争を宣言した時から始まる、と言っても過言ではないだろう。この時サヌアーにいたトルコ軍を包囲するために、イエメン全土から2万人が集結した。この包囲戦は6ヵ月間続き、ヤヒヤーはサヌアーに入城し、トルコ軍はその影響下にあったティハーマ等に撤退する、という合意が成立した。しかしトルコのスルターン・アブドゥルハミードはこの合意を是認せず、アハマド・フィーディーに軍隊を授けてヤヒヤー逮捕を命じる。ヤヒヤーはサヌアーを撤退し、シャハーラを拠点に山岳地帯を中心としたゲリラ戦に転じる。それに加えトルコ軍の兵士達は、給与未払い等により指揮が低下し、結局トルコ政府は、再度和平を模索しなければならなくなり、メッカから学者達を派遣し、交渉させることにした。一方でアハマド・フィーディーを罷免し、イエメン総督としてハサン・タハシーンを派遣するが、事態は改善出来なかった。そこでアブドゥルハミードは、直接イエメンの使節団をイスタンブールに召還するが、このメンバー達は様々な権益を代表しており、意見の統一が成されておらず、会談は失敗に終わった。その後ヤヒヤーの代表者達がスルターンと会談するが、トルコの官吏達の妨害により話し合いは不調に終わった。

だが、トルコで「統一と進歩委員会」がクーデターに成功し、トルコ民族優先主義が採られると、帝国内のアラブ諸州では反トルコ運動が激化していった。イエメンのトルコ人総督は、ムスタファー・カーミルそしてムハンマド・アリー・パシヤと続き、彼等は圧政を敷き、イエメン人達の反トルコ運動は激化し、トルコ政府は、イエメン経験の豊かなアハマド・イゼット・パシヤ将軍に全権を持たせて、事態の鎮静化を図った。

そしてこの将軍との戦争が、まずアシール地方で始まった。この地方を占領していたアルイドリーシーがトルコ人税務署長のスワイディーとトルコ軍将校を多数逮捕することによって、オスマーン帝国に対する挑戦を開始した。後に、彼は戦闘で孤立し、イタリアやイギリスそしてリヤドのイブン・サウードやメッカ大守であったフセインに、応援を求めることになった。この両者の戦闘で最も悲惨を極めたものは、アシール地方のジーザン峠での戦いである。そしてこの戦いでオスマーン軍は甚大な損害を蒙り、これが和平交渉の直接の要因となる。

イエメン人達との戦闘は、ホダイダからサヌアーへ向かう途上で起こるのだが、なかでもバイト・アッサラーミーとカムラーン地方での戦闘は、大勢の死傷者が出た。だが最新兵器を装備したオスマーン軍を前に、イエメン人達は撤退を余儀無くされ、イマーム・ヤヒヤーは、山岳地帯の町シャハーラをその後の拠点とする。そしてイゼット・パシヤ将軍は、1911年4月5日にサヌアーに入城を果たすのであった。

しかしながら、対イエメン戦での人的・物的損失は、オスマーン軍に和平交渉を強いる結果となる。そしてこの和平協定は、締結された村の名前を取りダッアーン協定と呼ばれることとなる。この交渉の成功の要因は、メッカの大守であったフセイン等の調停者の努力や、イタリアのイエメンへの野心

に対する警戒心、そしてイゼット・パシャ将軍に全権が委任されていたこと等が挙げられる。

協定そのものは、イマーム・ヤヒヤーの属するザイド派のハーキム（統治者）を、指名する際にイスタンブールの承認を得ること、またトルコ政府の支配する地域のハーキムはイエメン人以外の者を選出する等という項目を含み、イエメンの分割を確固なものとしている。その他、戦争に疲弊した地域には税金を免責し、恩恵をもたらしたが、イマームに対しては、収益の10%をトルコ政府に支払う義務が果せられることになる。

この協定はイマーム・ヤヒヤーにとって、自分が影響力を行使し得る地域においては、半独立状態の確立と権利を勝ち得たことを意味し、一方トルコ政府にとっては、戦闘によって受けた損害の回復の時間稼ぎが出来、その期間中もイマームに影響を残すことが出来るというメリットがあった。

この交渉の後、イゼット・パシャはトルコに戻り、後任としてマフムード・ナディームが着任するが、彼がオスマーン・トルコ帝国最後のイエメン総督となる。この時期に、イマーム・ヤヒヤーは、リヤドのイブン・サウードやメッカ大守のフセイン、そしてイギリス等との衝突を避けながら、アシールに残っていたアルイドリーシーとの確執を続けることになり、こうした状態が第1次世界大戦まで続くことになる。

1911年イマーム・ヤヒヤーとオスマーン帝国との間でダッアーン和平協定が締結した。イマームは第1次世界大戦後に締結されたムードロス休戦協定が効力を発し、トルコがイエメンから完全に撤退した1919年になるまでサヌアーに入城しなかった。

第1次世界大戦の初期にトルコ軍はアデンにいたイギリス軍を攻略するために、サイード・パシャ陸軍少将をラヘジュへ向けて派遣する。しかしラヘジュのスルターンであったアリー・ブン・ムフセン・アルアブダリーは、イギリスがスルターンに対して約束していた保護協定を考慮し、自分の領地を攻略軍に解放しなかった。この時イマーム・ヤヒヤーは心情的にトルコ側に味方し、ラヘジュのスルターンに書簡等を送るのであるが、公式には第1次世界大戦の情勢を鑑みて中立を保っていた。

トルコのラヘジュ攻略部隊は、1914年にラヘジュの首都のアルハウタ市を占領することに成功した。サイード・パシャ将軍は3年間ラヘジュを占領し、再びラヘジュにスルヤーンの一族が帰還するのは第1次世界大戦の終結を待たねばならなかった。

トルコと連合国との間のムードロス休戦協定発行後1918年、イギリスのアデン総督のスチュワートに対して、サイード・パシャ将軍は自らの身柄と軍隊及び装備等を引き渡し、ラヘジュを去って行った。

イマーム・ヤヒヤーは中立的立場を維持していたが、イギリスは彼の態度に満足せず、トルコ軍の撤退が遅れていることを理由に紅海岸のホダイダ等の港湾都市を砲撃し、これを占拠し、イギリスの同盟者であったアリー・アルイドリーシーに引き渡した。

ラヘジュの侵攻作戦とは、アデン制圧とアデンからの英軍の排除を狙った侵攻作戦のために、アデンに至る道中を確保するためのものであり、トルコ側にとっては副次的な目的であった。

また一方で、オスマーン帝国の圧力を要因としながらも、イギリス人達との戦いと彼等の追放とい

う宗教的義務を動機としていたのであった。

イマーム・ヤヒヤーは、サイド・パシャ將軍の呼び掛けに呼応してラヘジュと南部諸地域を引き取ることを怯んでいた。彼は当時、依然としてシャハーラに居て、未だにトルコからサヌアーを受け取っていなかったからである。何故なら北部での彼を取り巻く状況は、その様な試みに立ち上がることを可能にする程には安定していなかったからである。同様に彼は自分の国が独立を獲得しようとしている時に、イギリス人達を刺激して彼に敵対させる事を望まなかったのである。

第1次世界大戦中、また大戦直後のオスマーン帝国とイマーム・ヤヒヤーとの関係は良好であった。それはイマームが戦争に対して中立の立場をとり、連合国に加盟せずに、ダッアーン条約の責任を果たしたからであった。

1919年の初頭に全トルコ軍のイエメン撤退は完了した。その事でイエメンは独立を手にした。1923年7月24日、スイスのローザンヌで開催された和平会議の第2回目の会期中に、イエメン独立は国際的に承認され、トルコの支配は終焉を告げた。

イエメンにおいてオスマーン・トルコが残したものは、文化・産業等の分野においては見るべきものが殆どなかったが、軍事分野においては、後の革命の指導者達を生み出していく組織や軍事学校を残していった。

イマーム・ヤヒヤーとイドリース家

ムハンマド・ブン・アリー・ブン・ムハンマド・ブン・アハマド・アルイドリースーがイエメンのティハーマ地方のアシル州のスレイマニーヤ行政区にイドリース首長国を創設した。彼の呼び掛け（注1）はヘジラ暦1327年（西暦1908年）第1月ムハッラム月のことであり、この年はトルコにおけるオスマーン・トルコの憲法クーデターの年であった。

（注1）「善き称賛の広まり」イスマーイル・ブン・ムハンマド・アルワシュリー著、第1巻P.78

彼の祖父、アハマド・アルイドリースー（注2）は、彼の生誕の地であるモロッコのフェズ行政区のアルアラーイシュからメッカにヘジラ暦1214年（西暦1799年）にやって来た。（注2）

（注2）「アラブの王達」アミン・アッライハーニー著、第1巻P.153、引用要約

西暦18世紀初頭、アハマド・アルイドリースーはザビード行政区にメッカから移住し、そこで説法や訓戒を垂れるために巡回を始めた。それから彼はザビードから前述のスレイマニーヤにあるサバヤーへ移住し、そこに落ち着き、ヘジラ暦1253年（西暦1837年）の彼の死に至まで、説法や訓戒の活動を行った。スレイマニーヤ行政区のサブヤーとアブー・ウライシュは当時、カーシム家の国家の影響下にあった地方の支配者であったアブー・ウライシュの監督に従っていた。

アハマド・アルイドリースーは、後に膨大な富を残すことになったが（注3）、後に孫のムハンマ

ド・ブン・アリー・アルイドリーシーはこの資産に継り付く事になるのであった。この孫は、前記のイドリース首長国の創設者であり、祖父の残した資産を活動資金に充てたのである。同時にスレイマニア地方におけるイドリース家という精神上的の地位と広範な文化的素養を背景に、行政・政治上の手腕を發揮した。またエジプトのアズハル大学を卒業し、スーダンから彼が帰還して以来、スレイマニア地方に存在していた混乱に乗じて活躍することになる。

(注3) 「オスマーン統治下のイエメン」 フェールーク・オスマーン・アバーザ著、P.197

スーダンに居た頃は、彼の周りにスレイマニア地方から族長や部族民等がやって来ては、オスマーン帝国が彼等に行わなければならない報酬の支払いを履行していない、と洩らすのだった。その報酬というのは、スレイマニア地方を統括していたトルコ支配に対して、彼等が素直に服従する見返りに支払われていたものであった。一方トルコ人達はムハンマドには関心を示さず、単に宗教的情熱にかられた男の一人に過ぎぬと考えていた。

これに対してムハンマドは当初、オスマーン帝国に服従する姿勢を示し、トルコ人達に忠誠を誓うふりを装っていた。ところでイマーム・ヤヒヤーのことになるが(注4)、ムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーがスレイマニア地方に対して宣教を広めることに成功し、イエメンの首長権の中心地サアダの周辺に散在していた諸部族にまでその宣教が伝わり始めると、ヤヒヤーは自らイドリーシーと共闘を組み、一時的にせよ、対トルコ戦では共闘し、トルコ攻撃とトルコ勢力の排除の機を共に狙わざるを得ない、と知るに到った。

(注4) 「オスマーン統治下のイエメン」 フェールーク・オスマーン・アバーザ著、P.198

「メッカ太守フセイン・ブン・アリーの「イエメン旅行」 シャルフ・アブドゥルムフセン・アルブルカーニー著、P.3-4より引用

一重にスレイマニア地方も、アシール県全域も共にイエメンから分離する訳にいかない部位だとヤヒヤーは信じていたからであった。

こうして事実上はイマーム・ヤヒヤーとムハンマド・ブン・アルイドリーシーの間における連合が成立したのである。他面では1905年(ヘジラ暦1323年)にカイロのアズハル大学卒業後すぐにイドリーシーは、カイロのイタリア大使館に勤務する通訳のムハンマド・アリー・アラウィーを介してイタリアと連絡を取り始めた。

この時イタリアは、リビア攻撃を準備していた。トルコ領内の何処でもトルコに対して開戦する際には、協力を求められるリーダー格の人物をイタリアは探していた。リビアの西トリポリ領をトルコが防衛しようとするのを阻止することが狙いであった。イタリアにとってムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーは長年探し続けていた恰好の人物であった。後述することになるが、対トルコ戦の前にイタリアとイドリーシーとの間の同盟が成立したのであった。

ムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーのイタリアとの接触やアシール地方での彼の出現を

オスマーン帝国が知っていたにもかかわらず（注5）、しかしながらクーデター後の「進歩統一」党と「相互調和」党の党派闘争や党指導部の権力闘争にオスマーン帝国は明け暮れていた。重要なのはスレイマニアでもアシール州でのムハンマド・アルイドリーシーでもなかった。何故ならトルコはその地域での状況の安定のために活動していたし、反オスマーン・トルコのアルイドリーシーの進捗に対する制限を設けていたからであった。

（注5）「オスマーン統治下のイエメン」フェールーク・オスマーン・アバーザ著、P.207

「スレーマニーヤ地方の歴史」ムハンマド・アハマド・アルウカイリー著、第1巻P.91より引用

アシール州の知事から勢力を増すアルイドリーシーの活動やオスマーン帝国への明らかな侵略についてのメモが繰り返してトルコになされた時に、ジーザーンに軍隊と共に代表を派遣した。その代表団と軍の長はアリー・サイード・パシャ中将で、メンバーにはイスタンブールのアハマディア宗派のシェイフであったタウフィーク・パシャ・アルナーウウティがいた。この宗派はイドリースが信奉していた宗派だった。この事はサイード・パシャ中将がタウフィークに、サバヤへ向かうイドリースへの代表の委員会において、権限を与えて派遣した際、彼等2人の間を接近させることになった。タウフィークはイドリースと親交を深め、後に彼の元に亡命した。

一方代表団は、西暦1910年（ヘジラ暦1328年）の初頭にジーザーンに到着した。そしてそこから（注6）前述のアルナーウウティを団長とする小派遣団をサバヤーにいたイドリースの元に下見の為に派遣した。アルイドリーシーは彼の政治的経験と有名な巧妙さで彼を出迎えた。

そしてアルイドリーシーはアルナーウウティに対して、自分はオスマーン帝国の臣民の一人であり、首長の座や王座を望んではないと告げた。また彼が行った事は宗教的な熱情と「善行を命じ、忌み嫌われた事を禁ずる」事が彼を押しやったのであり、彼の祖父アハマド・ブン・イドリースが初めてこの地に到着して以来、その一族はこの様な宗教心で著名だったのである。

（注6）「オスマーン統治下のイエメン」フェールーク・オスマーン・アバーザ著、P.198

「スレーマニーヤ地方の歴史」ムハンマド・アハマド・アルウカイリー著、第2巻P.93より引用

アルイドリーシーは派遣団に、オスマーン帝国はスレイマニア地方を無視し、その結果この地方の諸部族間で蜂起や戦闘が起こったのだ、と解説した。また彼は自らの義務として彼等を正しい道に導き、彼等を感化していかねばならないと思ひ、それにより彼は治安の安定化やこの地域の住人達との憎悪の一扫そしてイスラーム法学の地を再生する事によってオスマーン帝国にも貢献出来た、と説明した。

小派遣団とアルイドリーシーは、ジーザーン近郊のアルハファーイル村での彼と代表団長との会談の日取りを決定した。約束の期日にサイード・パシャとアルイドリーシーはやって来た。アルイドリーシーは既にスレーマニーヤ地方の諸部族の族長達に彼の下に馳せ参じるように求めていたが、これは慎重をきたすためであった。アルイドリーシーは代表団に対して代表団のメンバーであるアルナ

ーウウティーに対して説明した様に説明し、そして両者は次の要約の様な合意に調印した。

1- アルイドリーシーにオスマーン帝国に対しての臣下の礼をとることを承認すること。

2- アルイドリーシーに対してスレーマニーヤ地方の行政長官の地位を与える。彼はオスマーン帝国の公務を司る者としてサブヤー及びそれに付随する地区、即ち南はサーミタから北はハリー・ブン・ヤアコブに至までの諸事を執り行う。

3- アルイドリーシーはスレーマニーヤ地方の港湾の諸税関拠点をオスマーン帝国により派遣された官吏が運営していく事を許容すること。

4- アルイドリーシーはイエメンとヘジャーズ間の電信線のスレーマニーヤ地方内の延長を約束すること。

5- オスマーン帝国は税金の放棄を約束し、イスラーム法上のザカート（喜捨）で満足すること。そしてアルイドリーシーはオスマーン帝国に代わりその徴税に当たること。またその内の三分の一は彼の支出やスレーマニーヤ地方の治安維持軍の支出に充てること。

この合意によりオスマーン帝国は、アルイドリーシーが帝国に従うことにはなったものの彼の存在並びにジーザーンを除く地域の統治者として彼の存在を法的に承認した事となった。アルイドリーシーは帝国よりの独立において、さもなければ帝国との戦争において、彼がとった段階的道筋に沿ってこの承認を受け入れた。

サイド・パシャは協定の写しをアシール・アルジバール県の長官へ渡し、アルイドリーシーは合意の各項目を実行し始め、その地方に於ける彼の代理人を任命した。同様にアルイドリーシーは合意の項目に応じてオスマーン帝国の計上したお金で彼の拠点を強化することで、与えられた統治を始めた。

アシール・アルジバール県の長官は事の重大性を認識し、無駄なことではあったが、オスマーン帝国へのレポートを送付し続けた。それから長官はカムランへまたホダイダへと居を移し、同様に無駄な事であったが、反アルイドリーシーのためにオスマーン帝国を刺激するよう海岸に沿った電信線を用いオスマーン帝国への連絡を増やしていった。長官はアブー・アリースにオスマーン帝国軍事拠点を設営することに関してアルイドリーシーと交渉しようと考えを変えたが、この事は合意に対する違反であるとの根拠により、成功しなかった。

それから長官は別の事を試みたが、それはジーザーンの防衛の強化であった。つまりジーザーンに駐留している大隊の代わりとして歩兵から成る大隊を派遣する、と言うもので、この事は2大隊を駐留させることを目的としていた。しかしながらムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーは変更の目的を察知し、その大隊が通過する部族の長に対して、ジーザーンへ大隊と一緒に行きジーザーンから帰って行く大隊に同伴する事を命じた。同様にこの部族をジーザーンから出たり入ったりする大隊に同伴するために歩兵から成る中隊で強化した。

既にオスマーン帝国は事の真相を確信した。そしてアルイドリーシーをイスタンブールに召還した。表面上は地域の古くからの宿敵アハマド・アッシャリーフの両手を切断した問題に関して彼に返答を

求めるためであった。アハマド・アッシャリーフはこの事件の後、アルイドリーシーに対する苦言を呈しにイスタンブールに到着することが出来たのであった。

オスマーン帝国はアルイドリーシーが要求に応じず、イスタンブールに到着しない事を知っていた。何故ならアルイドリーシーはこの召還の背後に有るものや、その要求に答えた場合に起こり得ることも知っていたからであった。

しかしオスマーン帝国は召還に応じない場合、彼の申し開きを目的にしていた。彼がトルコへの到着を拒否した時に、オスマーン帝国は、ムハンマド・ラーギブを団長とし指揮官とする代表団を軍隊と共に派遣した。そして彼にアルイドリーシーとの書簡の往復を開始し、必要があれば戦闘やサブヤーへの侵攻に関する全権を与えた。

代表団々長の強い要求に対してのアルイドリーシーの不服従は、ジーザーンやアシール州の他の地区のトルコ軍守備隊が支援する前述の軍隊との間の戦争を導くこととなった。しかしトルコ軍は両者の間で起こった最初の戦争で敗北を喫した。何故ならジーザーンの人々に水を供給しているアルハフアーイルの水をアルイドリーシーと彼の諸部族が支配していたからであった。そしてトルコ人達は、戦闘で千人を越す死者を出した後、アルカンフィダ港へと撤退を余儀無くされた。

それからイタリアが西トリポリにおけるオスマーン帝国に対する戦宣告の準備段階として、艦砲射撃によりアルカンフィダ港へ攻撃を加えた。またこの事はイタリアとアルイドリーシーとの間で結ばれた合意を遂行するために、イエメンにおけるアルイドリーシーとの戦争からオスマーン帝国の気を逸らすことにあった。この事件は1910年（ヘジラ暦1328年）の事であった。

またアルイドリーシーの軍隊はアブハー及びアシール山にいたトルコ軍の残留部隊を攻撃し、完全な包囲網を敷いた。そしてこの事は前述の年の事であった。アブハー駐留軍に対する包囲網の圧力は厳しさを増し、結局この駐留軍はアルイドリーシーの軍門に下ることになった。そしてアルイドリーシーはオスマーン軍が所有していた武器、軍需物資、弾薬、糧食を撤収した。実はこれ以前にも先述した「アルハフアーイル村の戦闘」として名高い初めての決戦でトルコの敗退直後に、ジーザーンにおいてこれと同じ様なものを押収していたのである。

アルイドリーシーに幸いするアシール州の状況展開に直面したオスマーン帝国は、アルカンフィダ港へ軍隊を派遣せざるを得なかった。更にメッカの大守であったアルフセイン・ブン・アリー・アルハーシミーに対して、トルコとの軍事同盟の遂行と対アルイドリーシー戦でトルコ軍と共同戦線を敷く様に要請した。

大守は自分の軍隊を引き連れ、更に2人の息子ファイサルとアブドッラーを伴って来た。トルコ軍はナシャアト・バシャを将軍としアルカンフィダ港を出発した。両軍はハリー・ブン・ヤアコーブの涸れ川で出会った。両軍はそこからアルイドリーシー軍の前線を目指し進軍した。そしてアルイドリーシー軍を追い払い、敗走軍の後を追ってアシール州の内奥まで進撃を続けた。

この他にもトルコの軍艦2隻もアルイドリーシーの影響下にあった港湾を幾つか攻撃した。それ等の港はアルバルク、アルカフマ、アッシャキーク、といった場所であった。オスマーン帝国はアハマ

ド・イゼット・パシャ将軍指揮の下、イエメン攻撃の拠点としてアシール州において軍事力を強化した。トルコ軍はアルイドリーシーがアブハーに課した包囲網を打ち破ることに成功し、アルイドリーシーを隣接した山に追い込み、山中に築かれた城塞に立て籠もらせることが出来た。

しかし1911年（ヘジラ暦1329年）イタリアは西トリポリ（リビア）侵略失敗御に、オスマーン帝国に戦宣告し（注7）、トルコ軍が駐留しているアシール港を攻撃した。

（注7）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P214

トルコ軍との戦いではアルイドリーシーを支援し、艦砲射撃の砲弾によりトルコ軍に打撃を与えた。一方イゼット・パシャを指揮官とするトルコの主要部隊はサヌアーに向けてホダイダへと進軍続けた。アルイドリーシーは幾つかの地域、ワーディー・ハリーやその他で自らの影響下の地域の幾つかを取り戻すことが出来た。

そしてダッアーン合意として知られる、アハマド・イゼット・パシャ将軍を代表とするトルコ国とイマーム・ヤヒヤーとの間で和平が結ばれた時、イマーム・ヤヒヤーとアルイドリーシーの間にあった友情や絆や協力関係にひびが入り、アルイドリーシーはトルコとの戦争で孤立することになった。

しかしイタリアが次の2つの目的のためにアルイドリーシーを支援した。その最初のものは、アルイドリーシー支援を通してイエメンに浸透するという企てのためである。もし成功すればエリトリアやエチオピアを植民地化した後、イエメンを植民地にするという昔からの野望を実現出来るであろう。

2つ目の目的は西トリポリを防衛させることによってトルコの気をイエメンから逸らせることにあった。そしてイタリアが西トリポリで足場を固めることによりアルイドリーシー支援の目的を喪失し、イエメンにおける足場を築けなくなった時に、イタリアはイエメンから姿を消した。

一方アルイドリーシー派イギリスと同盟を結んだ。そして彼は反トルコ側に立ってイギリスと相互条約を結んだ最初のアラブ人リーダーとなった。また同様に第1次世界大戦末期、正確に言えば1916年、アラブ革命宣言後、メッカとも同盟関係を取り結んだ。この様にアルイドリーシーはアシール地方に浸透し、その全域に彼の影響力を拡張することが出来た。

既にアルイドリーシーは（注8）、イマーム・ヤヒヤーがトルコとの和平協定を取り結んだ後で、アシール州に隣接するサアダ州のみならず、ハーシド州の諸部族に反イマーム・ヤヒヤーの宣伝を広めていた。

（注8）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.300

それはイマーム・ヤヒヤーがこの和平協定をもってトルコとの闘争から身を引いてしまった、ということを主張したものであった。サアダ州とハーシド州のイマーム・ヤヒヤーの王国に従属していた諸部族はアルイドリーシーと連絡を取ったり、彼に友好を宣言し始めたりした。また同様にハーシドのマンスール・ブハイト翁は彼の部族の多くの子息を、彼及び彼の部族のアルイドリーシーに対する友好と彼等の彼に対する忠誠の確認のために、人質としてアルイドリーシーの根拠地であるジーザー

ンに送って来た。

イーム・ヤヒヤーは（注9）とトルコ側はアルイドリーシーの危険性を認識し、彼の影響力の拡張や継続する成長、そしてアシール州のみならずイームの影響力下にある諸地域の部族までもが彼に引き付けられていることに恐れをなしていた。

（注9）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.301

そしてオスマーン帝国はイーム・ヤヒヤーに対して、アルイドリーシーに書簡を送りイスラームへの貢献のためにオスマーン帝国との和平条約の締結し、宗教の敵であるイタリアとの相互協力を止める事を促す様に求めた。特に後者の件はイタリア軍がトリポリを占領し、イスラーム的なカリフ制を有する国家（即ちオスマーン帝国）から彼の地を強奪した後のことであった。

これに関してイーム・ヤヒヤーに対してアルイドリーシーは次の様に返答している。即ち、彼はトルコに接近し、彼等と和平条約を締結しようと4回試みたが、無駄であった。そして彼即ちアルイドリーシーを満足させる規範に則ったトルコとの和平条約を受け入れると強調した。そしてその和平条約とはトルコ人達がイーム・ヤヒヤーと締結したものを規範にしていなかったことであった。

それはあたかも彼がイーム・ヤヒヤーに対して次の様に言っているかの様であった。即ち、もし私がサイド・パシャ少将とヘジラ暦1327年に汝が結んだ和平条約を受入れ、そしてオスマーン帝国のアシール州の長官になることを受け入れるならば、その様な事は既に私の側では一時的且つ基本的には完了している事なのである。

即ちそれは帝国からの私の影響力に関する保証的な承認であり、オスマーン帝国に対していかなる拘束や条件を課さないで、私の要求を受け入れさせるために、将来において私にチャンスを与えるためなのである。そして正にその事を実現するための時が来たのだ。

また同様に彼はイーム・ヤヒヤーに対してオスマーン帝国と締結したダッアーン合意として知られる和平協定に関して非難しているかの様であった。

そして事態が進展（注10）し、イーム・ヤヒヤーとアルイドリーシーの間にあった敵対関係は手に負えないものとなった。イームとトルコとの前述の和平協定が締結された直後、ラージフ地方で彼等2人の間で戦闘が起こった。しかし（注11）サアダ州のイームの総督であったムハンマド・ブン・アルハーディーが自らの軍隊を用いてアルイドリーシーを攻撃し、完膚無き敗北を与え、彼の軍隊から多くの武器や食料を戦利品として奪っている。出典によると、彼は30万挺の武器と豊富な戦利品を獲得した、と伝えられている。

（注10）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.307

（注11）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.307

上述の年から1912年（ヘジラ暦1330年）に至るまでアシール地方において、アブハーや他の地域に駐留していたトルコ軍とアルイドリーシーとの間で戦闘が再燃した。アルイドリーシーの軍隊はアブハ

一を初め、アシール地方の諸都市や拠点を奪回することが出来、また多くの弾薬や武器を戦利品として得た。そして再びイタリアがアルイドリーシーの軍隊を支援し、アシール地方のオスマーン帝国の軍隊の拠点となっていた諸港を砲撃するために戻って来た。また同様にイタリアは我々が既に見てきた様に、ホダイダ港を攻撃したのであるが、この事はエチオピア、エリトリア、西トリポリ（リビア）占領の後、イエメンを占領することを目的としていたからであった。

一方オスマーン帝国はアシール地方におけるアルイドリーシーの状況の進捗とトルコとの戦闘の再開、並びに上述の地域からの帝国の影響力の縮小に直面して、サヌアから陸軍をまた南部はアッリヒヤ港やその他から海軍を、そして北方からはメッカ大守の王子であったファイサル・ブン・アルフセイン・ブン・アリー・アルハーシミーを指揮官とする陸軍を派遣し続けた。

そしてこの事は、アルイドリーシーを排除した際に、アシール地方における大守職を彼（ファイサル）に委ねると帝国が約束した後のことであった。そしてまた同様にアッリヒヤ港からアシール地方の諸港に至までイエメンの多くの港湾に、イタリア海軍がアルイドリーシーを支援し、またイエメンに対するその野望を実現させないために海軍を駐留させた後のことであった。

一方ファイサル・ブン・アルフセインを指揮官とする陸軍は進軍したが、その構成員達の動機の欠如により敗北を喫した。そして1913年（ヘジラ暦1331年）、ファイサル王子は彼の軍隊と共にヘジャーズへと引き返した。オスマーン帝国は、ファイサル・ブン・アルフセインの敗北の後、新たにアルイドリーシーの軍事力の範囲を認識した時（注12）、再び彼との和平を画策する状況へと戻っていった。そしてアッリヒヤの長官であったイブラーヒーム・ベク・ハリールは1913年3月10日の日付けで、アルイドリーシーに書簡を送り彼との面談の許可を求めた。

（注12）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.327

そして彼等が対談した折りに長官は、アルイドリーシーに次の様な事を明白にした。即ちイエメン総督のムハンマド・ナディームはイスタンブールの宮廷から彼とオスマーン帝国との和平の締結と諸問題の決着のために、彼と交渉する様にとの命令を受け取っている、と。アルイドリーシーは、新たに交渉の扉を開く事に関して障害となるものは彼の下には存在していない、と表明した。そして上述の長官はアッリヒヤに戻りそしてイエメン総督のムハンマド・ナディームに向け電報を打った。

そして彼はサイド・パシャ少将を伴いサヌアを出発し、2人は前述の1913年3月27日にアッリヒヤに到着した。そしてそこからアルイドリーシーに対して、両者の中間に位置する町であるという事を基盤として、マイディーに来る様に要請した書簡を送った。

アルイドリーシーは交渉における彼の代表として、アミーナ・ムハンマド・ブン・ヤヒヤーを団長とした派遣団を送った。そして彼にムハンマド・ナディーム宛の彼からの書簡を持たせ、その中でムハンマド・ナディームに対して、オスマーン帝国の要求全てを自分に伝えるよう、アミーナに伝える事を求めた。彼は書簡の中で「貴方達の望む事を私が知るために」。

歴史家のアルワシーは、彼の歴史書（注13）の中で次の様に述べている。ムハンマド・ナディー

ムを団長とするアルイドリーシーへの使節団は、かつては彼とイマーム・ヤヒヤーとの間の和平を実現させるためのものであった。

(注13) 「イエメン史における悲惨と貧困の調査」 アブドルワシー・アルワシー著、P.326

その条件としてアルイドリーシーを十分な月給制でその地域の行政長官とし、イマーム・ヤヒヤーの服従下に置くというものであった。イマームは当時滞在していたアッスウダからアルイドリーシーの元に使節団と共に使者を派遣した。

アルワシーは付け加えて次の様に言っている。即ち総督の使節団とその随行員達はアルイドリーシーの首長国の首都のジーザーンに到着した。アルイドリーシーは最初彼等との面談を辞退していたが、暫くして面会に応じた。しかし申し出に合意することなく、また双方は一致に達する事もなかった。

一般的に言うならば、ムハンマド・ナディーム総督を団長とする使節団は申し出を持ってやって来たが、ムハンマド・ブン・アリー・アルイドリーシーはその全てを拒否した。また彼自身が自らの役割として和平のための条件を携えてやって来た(注14)。その条件とはオスマーン帝国の下で、財政、軍事、行政、司法上のアルイドリーシー首長国の全ての諸事に関して、行政上の独立を彼に与えるというものであった。即ちオスマーン帝国にとっては名目上の主権以外には無かったのであった。

(注14) 「オスマーン統治下のイエメン」 フェールーク・オスマーン・アバーザ著、P.327

何故なら彼及び帝国の状況は、彼に対して現在の立場を保持するように彼を勇気付けていたからである。と言うのは彼の状況はイタリアが彼を支援した後で改善され、またオスマーン帝国の状況は1912年～13年(ヘジラ暦1331年～32年)におけるバルカン諸国との戦争のために困窮していたからであった。

アルイドリーシーにイマーム・ヤヒヤーの代理として地方統治を依頼する、という申し出について、彼はその申し出を受け入れなかった。何故ならアルイドリーシーはサアダ地方やティハーマ北部のイマームの影響下にある地域にまで浸透し始めたからであった。そして彼にはこれよりも多くの野望があった。

そして我々が後に見る様に、アルイドリーシーはその後、つまり第一次世界対戦後、イエメンのホダイダ、アッリヒヤ、モカ等の諸港を攻撃したイギリスと同盟を結ぶのである。イギリスはこれ等を3年間占領し、その後アルイドリーシーに受け渡した。

イマーム・ヤヒヤーがこれ等の港に影響力を及ぼすのは1623年(ヘジラ暦1343年)になるまで待たねばならず、そしてこの事は前述のアルイドリーシーの死後の事であった。勿論ムハンマド・ナディーム総督は、和平締結のためにアルイドリーシーが持ち寄って来た条件を受け入れなかった。和平交渉は決裂し、またアルイドリーシー側とムハンマド・ナディーム総督及びイマーム・ヤヒヤーの代表を含んだ随行員達との会談は徒労に帰した。

しかしながら次の様に言及するアルワシー以外の歴史家もいる。即ち、ジーザーンに到着した使節団は、ムハンマド・ナディーム総督の他、控訴裁判所長官フセイン・カーミル・ベクそしてサヌアー市内のワクフ（寄進）管財人カーシム・アルアジーそしてアブドゥルカリーム・ブン・アハマド・ムフタッ、またフジュール県の知事であったアハマド・ブン・ヤヒヤー・アーミルから構成されていた。

使節団がサヌアーに帰還すると、アルイドリーシーとイマーム・ヤヒヤーとの間で戦闘が再開された。ティハーマの北部のアルイドリーシーの影響力下にあった地域は、今度は両者の戦場と化した。サアダ州の総督はハラドの町を支配することが出来た。この町はその日までアルイドリーシーの手中にあった所であった。そして西暦1914年（ヘジラ暦1332年）以来継続していた両者の間の戦争は停戦となった。

上述の1914年には第1次世界大戦が勃発した。アルイドリーシーは1915年4月にイギリスと軍事同盟を締結した（注15）。イマーム・ヤヒヤーとはといえば、この大戦では中立を保つ必要性があった。しかしながら彼はオスマーン帝国に親近感を抱き、イエメン内のオスマーン領の州を通じて、州の支出をカバーするために秘密裡に資金を貸し付けていた。

（注15）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.348

ドイツと2つの同盟国トルコとオーストリアの崩壊をもって、1918年に大戦は終了した。そして連合国がトルコに課したマンドラース条約として知られた和平条約が締結された（注16）。この条約はトルコの降伏とイエメン、ヒジャーズ、イラク及びシリアよりの撤退を規定していた。そしてこの事は1918年10月30日の事であった。

（注16）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.395

イギリスは、当時まだオスマーン帝国の手にあったイエメンの諸港を、前述の年に攻撃した（注17）。その中にはアルホダイダ、アッリヒヤ、モカがあった。そしてその後それ等を占領した。この事はトルコ人達が撤退やサイド・パシャ將軍のアデンへの合流とそこからアナトリア半島への船出を緩慢に行っている、という主張に基づいたものであった。

（注17）「オスマーン統治下のイエメン」ファールーク・オスマーン・アバーザ著、P.410

イギリスのこれ等諸港に対する占領は3年間続き、それから彼等はそれ等をティハーマ地方の諸都市と共に同盟者であるムハンマド・アルイドリーシーに引き渡した。彼は西暦1922年（ヘジラ暦1341年）の第8月シャバーン月の彼の死まで、これ等諸港を占拠し続けた。彼の死はアシル地方におけるイドリース家の支配の終焉の始まりであった。

彼の死後、彼の追従者達が諸港を支配し（注18）、彼等は彼の死後、彼の長男であるアリーを後継者としたが、アリーが幼少であったために、彼の叔父であるアルハサン・ブン・アリー・アルイドリー

シーを彼に替わって指名した。もしくはアルハサンは首長国を甥であるアリー王子から篡奪したのかもしれない(注19)。アリーは西暦1926年にアデンへと逃亡した。

(注18) : 「イエメン歴史精選」アルジャラーフィー著 P.233

(注19) : 「現代イエメンの構図」アッサイド・ムスタファー・サーリム著 P.279

西暦1924年(ヘジラ暦1343年)にイエメンの軍隊は、アブドッラー・ブン・アハマド・アルワジールを指揮官として進軍し(注20)、ティハーマは両者の戦場の舞台となった。イドリース家は敗北し、イエメン人達はアルホダイダ、アッサリーフ、マイディーとそれ以外の港町とティハーマ地方の諸都市全てを手中に収め、イマーム・ヤヒヤーはそれ等の町に総督や知事そして官吏達を任命した。

(注20) : 「イエメン史における悲惨と貧困の調査」アブドルワシー・アルイワシー著 P.274

そしてイエメン軍はアシールに向け進軍を継続し、サブヤーとジーザーンの両都市を包囲した。アルハサン・アルイドリーシーは止むを得ずイマーム・ヤヒヤーに対して和平を提案した。この和平案は、イドリーシーがイマーム・ヤヒヤーに対して友好を保持し、アシール地方に対するイマームの支配を承認する見返りに、上述の2都市の占領の試みを中止することを明記するものであった。但しアシール地方に関してはイドリース家に地域的な影響力を与える様にという条件が付けられていた。

しかしながらイマームはこの提案を拒否した。そしてアシール地方の占領の試みを継続する事に固執した。従ってアルハサン・アルイドリーシーは止むを得なく、サウド家のアブドゥルアジーズ王との防衛協定に調印する事となった。この事は西暦1926年(ヘジラ暦1345年)のことであった。これ以前にアルハサン・アルイドリーシーは、アブドゥルアジーズ王に彼の庇護下に入りたいと要望したが、その申し出を拒否されていた。

というのは当時アブドゥルアジーズ王は、ヘジャーズ地方のハーシム家の占領下の孤立地帯の一掃に忙殺されていたからであった。そしてアルハサン・アルイドリーシーに対して、彼はアシール地方の諸事に関しては中立の立場を保持することを表明していた。

一方イマーム・ヤヒヤーはアシール地方のイドリース家の影響力を最終的に根絶することに固執し、アルハサン・ブン・アリー・アルイドリーシーは止むを得なくアブドゥルアジーズ王の庇護下に入る件に関して再度試みなければならなくなった。そしてこの事は、アブドゥルアジーズ・ブン・サウード王の当時の状況の好転も恐らく関連していたのかもしれないが、アルイドリーシーの申し出を受け入れさせ、上述の日付けで防衛協定の調印を導くことになった。

そしてこの事によりイマームは彼の最大のライバルであるアブドゥルアジーズ王との敵対関係に突入するのであり、我々は後にこの件に関連した章において知ることになるが、イエメンとサウジアラビアの諸事件の発端ともなったのである。

「イエメン概説史」第5巻〔現代史〕P.57～58